

生物学的な観点から補綴物形態を再考するための一冊

歯界展望別冊 「Tooth Preparation」を読んで

●本書の編者たち

筆者は40年ほど前に、本多正明先生（大阪府東大阪市／本多歯科医院）、山崎長郎先生（東京都渋谷区／原宿デンタルオフィス）と同じ診療室で働いていたことがある。ともに師と仰いだUSC（南カリフォルニア大学）のRaymond Kim先生の教をバックグラウンドに、3人で臨床の面白さと難しさに夢中になっていた。

当時、Kim先生の診療室には多くの先生がたが見学に来ていたが、あるとき大阪から、大学を卒業して間もない若い先生が訪ねて来た。独特の世界観を持ち、常に「ホンマでっか？」の精神を忘れずに、普通の歯科医師とは別の視点から臨床を見ていたその先生こそが、本書の編著者の一人である西川義昌先生（鹿児島県曾於市／すみよし歯科）であった。

数年後に西川先生は山崎先生の診療室に住みつき、「ボス」の下で歯冠修復と歯周治療のノウハウを学んだ。数年後には、Kim先生が「内藤君、西川先生の支台歯形成をよく見ておきなさい」と仰るほどに形成技術が高まっていたことから、西川先生の偉大さが窺える。

そしてもう一人の編者が、誰であろう、歯科技工士の桑田正博先生（愛歯技工専門学校）である。先生は筆者が学生であった頃にはすでにDr.KatzやDr.McLeanらとともに金属焼付ポーセレンの研究開発に携わり、臨床応用のレベルにまで育てあげた「世界のクワタ」であった。

桑田先生は単に技術を高めた“色出しが上手な人”ではなく、機能を学ぶ

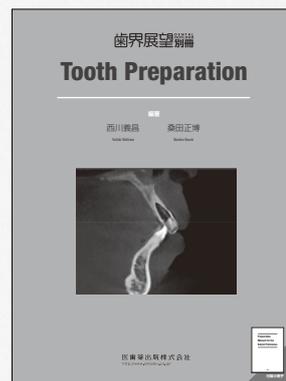
ことを忘れない人である。だからこそ、多くの歯科医師が桑田先生を師と仰ぐのであろう。

●支台歯形成についての基本線を目で見て学ぶ

今回、南 昌宏先生（大阪市北区／南歯科医院）を始めとした、気鋭の若手歯科医師の共著による本書を拝読した。「よくここまでまとめたな」というのが筆者のまず抱いた読後感である。参考文献にはDr.Nevins, Dr.Gargiulo, Dr.Dempster, Dr.Stein, 上条 雅彦, 高橋和人（神奈川歯科大学名誉教授）らの名前が挙げられており、歯科医師が支台歯形成に先立って目を通しておくべき成書のほとんどが網羅されている。そして、それらの文献から基準となる数値がまとめられており、歯冠修復治療のガイドラインが明確になっている。図版と症例写真が豊富に取り入れられ、三面形成のポイントが多くのCT（コンピュータ断層撮影）画像とともに模式図で表現されるなどビジュアルに仕上げていることも特徴的である。

特に若い先生がたに注目してほしいのは、いずれの執筆者も軟組織との関係を常に念頭に置いているところである。

支台歯形成には「Longevity（長期性）」「被圧変位に対する強度」「外観への配慮」という三つの側面があると筆者は考えているが、中でもLongevityという観点からはマージンの設定位置と形態、清掃性が優先されるため、補綴物と軟組織との親和性がきわめて重要なポイントとなる。Biologic width（生物学的幅径）の概念



- 西川義昌・桑田正博 編著
- A4判変
- 定価：本体 5,800 円＋税 5%
- 医歯薬出版株式会社 刊

と歯肉縁下の形態についてはどのページを開いても繰り返し述べられていることから、この点が重要であることが受け取れるだろう。

筆者が考える、本書において最も着目すべき点は、歯間乳頭についての配慮である。歯間乳頭には天然歯におけるBiologic widthの概念は適用されず、審美性と軟組織の調和の取れたマージン設定が優先されると記されており、黒く見える歯間空隙（ブラックトライアングル）を埋めるために乳頭部を深く攻める昨今の傾向を強く戒めている。

* * *

本稿執筆現在、筆者も自著の執筆中であるが、それに際して本書の基本線から多くのことを学ばせていただいた。筆者の世代は理詰めの部分と直感に頼る部分とが混在しているが、感覚的な記述を避けるために自分の原稿の修正に入ろうと思っている。

本誌読者は、材料のコントロールや審美性の表現に関わる知識や技術については十分に手に入れておられるかと思う。歯科技工の“次の段階”に進むために、「歯周組織と補綴物の接点」という新たな視点を本書からぜひ学んでいただきたい。

（東京都港区・内藤デンタルオフィス／内藤正裕）